



墨の家



川崎ゆきお

若い人ほど合理的な考え方を持っているのは、今も昔も変わらないかもしれない。ただ、決まり事があり、それが変えられない場合は、その限りではないが、徐々に昔風な長ったらしい行事が少なくなった。

この合理性が発症するのは大人になる寸前だろうか。もっと若い頃から発症する場合もあるが、合理化を図るだけの力がないし、発言権もない。ある程度、自分の采配が効く頃になってからだ。

初音、これは女性ではない。初音という姓だ。この家は代々習字の先生を家業としているが、書道家と言うほどのものではない。その先祖は寺子屋で教えていたらしい。だから、老舗の習字塾だ。

この家の孫の公一が、合理性がどうの合理化がどうのを発症した。

流石にお爺さんには面と向かって言わないし、このお爺さんを敵に回すとまずいので、お父さんに、色々と言い出していた。どうせ自分が跡を継がなければいけないのだから、今のうちに合理化を図ろうとするものだ。

しかし、革命的なことを考えているわけでもなく、改革と言うほどのことでもない。家庭内の台所の配置換えのようなもので、より使いやすいようにシステムキッチンに変えるとか、その程度の話だ。

「硯がいけないのですよ。お父さん」

「どうして」

「筆ペンでいいじゃないですか。それに墨、何度変えましたか。子供がこぼすからですよ。その経費は結構かかります」

「だから、上敷きを敷いておる。中に染み込んだのは仕方がないが、滅多にない。すぐ拭けばよい。それでだめならゴザのような安い上敷きを買えばいいんだ」

「その上敷き代だけで馬鹿になりませんよ。だから、硯を使って墨にする行程はいらないんじゃないですか」

「ああ、私も面倒だし、第一お爺さんなんて、自分ですらないよ。神経痛で指が痛いってね」

「そうでしょ」

「だから、長い間私がすってあげていた」

「今度は僕がするんでしょ」

「まだそんな年じゃないよ。それよりどうしたものか」

「硯はやめましょう」

「しかしねえ、公一や、あれをするから習字なんだ」

「墨汁を買ってきた方がいいですよ。するだけで時間がかかるし」

「だから、その時間が良いんだよ。その間、特に難しいことをやっておるわけじゃない。ただ、ここで手を抜くと、良い墨ができません」

「そんな、スープみたいに」

「墨汁でもいいし、筆ペンでもいいが、それなら、良い筆を生徒に買わせるときの口銭が入らん。やはり、高い筆を買って貰わんとな」

「じゃ、墨汁でいいじゃないですか」

「しかしなあ、字を書くとき緊張するんだ」

「お父さんでもですか」

「お爺さんもそうだよ」

「そう言えば、僕も少しは緊張します」

「生徒の見ている前でやり直しはきかないからね」

「そうです」

「だから、精神統一の時間が必要なんだ。それが硯だ。ごしごしやりながら、気持ちを静めていくんだ。相撲でもいきなり立ったんじゃ、早すぎるだろ。何度も仕切り直しをして、気持ちを徐々に上げていくんだ。しかし、あれも今は短くなったけどね」

「そういう儀式が必要なんですね」

「お爺さんが引退したのは、自分ですれなくなったからだよ」

「そうなんだ」

「それにうちにある硯はね。国産じゃない。江戸時代に先祖が仕入れた中国産だ。大きいだろ。それに重い、瓦じゃなく石だからね。それに龍の絵が刻んであるだろ。これは貴重品なんだ。そういうのがいくつかまだ残っておる」

「僕もお爺さんから一つ頂きました」

「生徒の硯と比べてみなさい。格が違う。先ずこれが良い。これだけで箔が付く。もう売っていないんだからね。まあ、お爺さんは筆は握れるが硯がきつくなつたとき、墨汁を流し込んでいたがね。無駄なことも多いが、年を取ると、その無駄な時間が休憩時間になる。公一もいずれそうなるから、合理化もほどほどにすることだな。自分で自分の首を絞めることになるから」

しかし、年々子供が町内から減り、書道教室ではやっていけないようになった。

と、思っていたのだが、近くに高層マンションが建ち、その子供が習いに来るようになったため、持ち直した。

最近では、公一は合理化をやめ、筆ペンや墨汁もやめた。逆に子供達は硯や筆が新鮮だったようだ。また、いきなり書くより、硯を使っているときは休憩できるためだろう。

やがて公一が年を取ったとき、高層マンションもそれ以上建たないため、大人向けの書道塾に模様替えした。畳の上で正座し、儀式のように硯を使う。これはもうお茶やお花のようなもので、それなりに憩えるようなのか、何とかこれで持ち直した。そして、ベテランはもう大きな字ではなく、小さな字で、写経などをやっている。

当然若い頃の合理化云々の発症は、とうの昔に治まっていた。

了